

カンファレンスコール開催日：2025 年 8 月 7 日

2026 年 3 月期（2025 年度）第 1 四半期決算 カンファレンスコール 内容説明スクリプト

I. 全般概況

本日発表いたしました 2025 年度第 1 四半期連結決算 および 2025 年度連結業績予想の概要についてご説明をいたします。

1. 2026 年 3 月期（2025 年度）第 1 四半期 連結決算 業績概要

はじめに、2025 年度第 1 四半期の連結決算の概況をご説明します。事業環境等につきましては、決算短信に記載しておりますので、のちほどご参照ください。

補足説明資料の 2 ページをご覧ください。

まず、2025 年度第 1 四半期の金属価格および為替レートの実績についてご説明します。

3 月決算会社に適用される 4-6 月平均の前年対比については、銅とニッケルの価格は下落、金の価格は上昇、為替は円高となりました。

12 月決算会社に適用される 1-3 月平均の前年対比については、銅価格と金価格は上昇、為替は円安となりました。

連結売上高は、前年同期間に比べ 307 億円減少し、3,796 億円となりました。

連結税引前利益は、前年同期間に比べ 72 億円増加し、379 億円となりました。

2 ページのグラフでお示しているとおり、ニッケル価格の下落、為替の円高進行による在庫評価損益の悪化などがあったものの、既存の銅鉱山と金鉱山に加え、ケブラダ・ブランカ銅鉱山とコテ金鉱山の立ち上がりにより、銅価格と金価格の上昇の恩恵をより享受できたこと、また、数量差やコスト単価差の好転などが増益の主な要因です。

2. 米国関税の業績への影響について

次に、今回見直しを行いました 2025 年度の通期業績予想の概要をご説明する前に、当社業績に及ぼす米国関税の影響についてご説明します。

5 月業績予想発表時と同様、現時点でも直接的な影響は限定的と想定していますが、世界経済全体の縮小につながった場合、間接的な影響を受ける可能性があり、引き続き状況を注視してまいります。

3. 2026 年 3 月期（2025 年度）連結業績予想

今回見直しました 2025 年度の連結業績予想の概況をご説明します。補足説明資料の 5 ページをご覧ください。まず、業績予想の前提とした「金属価格・為替平均」はページ左下に掲載しています。

連結税引前利益は、1,020 億円と、前回 5 月予想から 20 億円の好転を予想しています。

その主な増減要因は 5 ページ上段のグラフでお示しているとおりです。

ニッケル価格の下落に加え、為替が円高水準で推移すると想定したことによる為替差と在庫評価損益の悪化に対し、銅価格と金価格の上昇、材料セグメントの好転を想定しています。

なお、今回の予想には、今年度中に発現する可能性がある減益要因「リスク要因」はおり込んでいません。

4. 2025 年度 実力損益（業績予想ベース）

補足説明資料の 5 ページに掲載したグラフの右端に、2025 年度の「実力損益」の予想を掲載しています。これは、2025 年度 8 月業績予想から、金属価格や為替の変動局面において発生する一時的な要因と、その他の特殊要因を除いたものです。

今回の業績予想における 2025 年度の実力損益は「1,100～1,000 億円」で、前回から変更はありません。

銅と金の価格の上昇はあるものの、ニッケル価格の下落、為替の円高などがその要因です。

当社の事業特性上、前提となる金属価格や為替の変動に応じた実力損益の変動は避けられないものですが、それぞれの前提条件のもとで利益を最大化するべく、今後も引き続き、安定操業の維持、生産効率の向上、および成長戦略の推進に取り組んでまいります。

5. 配当について

配当についてご説明します。

当社の配当に関する方針については、「剰余金の配当は、原則連結配当性向 35%以上とし、下限指標は DOE2.5%とする」としています。

今回、業績予想を見直した結果、2025 年度の年間配当額は、配当性向 35%よりも DOE2.5%の方が大きくなる見込みであることから、DOE2.5%を適用することとし、その結果、1 株当たりの年間配当金の予想は、5 月時点と同じ 1 株当たり 131 円となる予定です。

配当方針：「剰余金の配当は、原則連結配当性向 35%以上とし、下限指標は DOE2.5%とする」
DOE（連結株主資本配当率）

= 年間配当総額 ÷（前年度末「親会社の所有者に帰属する連結純資産」－前年度末「その他の資本の構成要素」）

II. 売上総利益、セグメント利益の内訳他の詳細

ここからは、補足説明資料について、ポイントとなる部分のみご説明いたします。

1. 2025 年度第 1 四半期決算 vs 2024 年度第 1 四半期決算

まず 2025 年度第 1 四半期決算と 2024 年度第 1 四半期決算の比較について説明します。

1) 3 ページ 実績比較 資源セグメント

それでは、補足説明資料の 3 ページ 実績比較 セグメント別－1 をご覧ください。

まず資源セグメントの売上総利益について説明します。

【資源セグメントの売上総利益】 247 億円（180 億円の増益）となりました。

① 菱刈鉱山（3 月決算）

サステナビリティ重視の操業方針に従い、平均品位での採掘を行っており、2025 年度は、年間販売量を 3.5t/年とし計画的に操業を行っています。2024 年度同期間と比べ、金価格の上昇により価格差が好転しています。

②コテ金鉱山（12月決算会社）

コテ金鉱山は、順調にランプアップを進めています。なお、コテ金鉱山は2024年3月末から生産を開始したため、2025年度第1四半期との比較において、その差は数量差としています。

③海外銅鉱山（おもにモレンシー銅鉱山：12月決算会社）

モレンシー銅鉱山は、12月決算会社に適用される1-3月の銅価格の上昇により価格差が、また、操業コスト削減や効率向上の取り組みの成果等によりコスト単価差が好転しました。

次に持分法投資損益について説明します。

①セロ・ベルデ銅鉱山、カンデラリア銅鉱山（いずれも12月決算会社）

主に12月決算会社に適用される1-3月の銅価格上昇により価格差が好転し、いずれも増益となりました。

②ケブラダ・ブランカ銅鉱山（12月決算会社）

ランプアップ中であった前年同期間に比べ、コスト単価は改善しており、加えて12月決算会社に適用される1-3月の銅価格上昇の追い風もあって損益は改善しています。

次にセグメント損益について、1点補足します。

ケブラダ・ブランカ銅鉱山開発に際し、当社が現地の銅鉱山運営会社に対して必要資金の融資を行っており、その融資に対する受取金利が含まれています。

2) 4 ページ 実績比較 製錬セグメント

それでは、補足説明資料の4ページ 実績比較 セグメント別－2をご覧ください。

次に製錬セグメントについて説明します。ページ左上「売上総利益」のボックスをご覧ください。

【製錬セグメントの売上総利益】35億円（316億円の減益）となりました。

銅系では2024年度に為替の円安進行や金価格の上昇により損益を押し上げた在庫評価損益の剥落、加工収入（TC/RC）が低下したことによる価格条件差の悪化、ニッケル系では価格低迷による価格条件差の悪化や銅系と同じく在庫評価損益の剥落がその要因です。

①銅系

a) 好転要因：

- ・コスト単価差：東予工場の操業費用の低下によるものです。
- ・その他：主に副産品である硫酸価格の上昇によるものです。なお、硫酸はフィリピンのHPALにおける主要操業資材のため、硫酸価格の上昇は銅系では利益に貢献しますが、ニッケル系ではコスト単価の悪化につながります。

b) 悪化要因：

- ・価格条件差：2025年度は2024年度に比べ、加工収入（TC/RC）が悪化しているためです。

②ニッケル系

a) 好転要因：

- ・コスト単価差：硫酸価格の上昇による影響はあるものの、日本拠点の操業費用の低下とCBNCの減価償却費減などによるものです。

b) 悪化要因：

- ・価格条件差：ニッケル価格の下落により悪化しました。
→ニッケル系は、加工収入が金属価格に連動する「シェアリング」という制度が適用されるため、金属価格の変動が業績に大きな影響を与えます。

3) 4 ページ 実績比較 材料セグメント

補足説明資料の4ページ下段、材料事業の製品群別売上高です。

電池材料については、順調に操業を続けていますが、販売価格に連動する金属価格が下がったため、減収となりました。

機能性材料については、パッケージ材料の一部製品の事業環境悪化と、2024年度に譲渡した建材事業の売上剥落により「その他」が減収となりましたが、それ以外の製品群については、同水準で推移しました。

次にセグメント損益について説明します。

機能性材料事業が、パッケージ材料の一部製品群の事業環境の悪化等により減益となりました。

2. 2025 年度 8 月予想 vs 5 月予想

続いて、2025年度の8月予想と5月予想の比較について説明します。

1) 6 ページ 2025 年度 8 月予想 vs 5 月予想 セグメント別

それでは、補足説明資料の6ページ 予想比較 セグメント別－1をご覧ください。

まず、前提となる金属価格、為替の平均について説明します。ページ右下のボックスをご覧ください。

銅価格は上昇、ニッケル価格は下落、金価格は上昇、為替は円高を想定しています。

資源セグメントの売上総利益について説明します。ページ左上「売上総利益」のボックスをご覧ください。

【資源セグメントの売上総利益】880億円（140億円の増益）と予想しています。

①菱刈鉱山（3月決算）、コテ金鉱山（12月決算）

いずれも、金価格の上昇により価格差の好転と、為替の円高進行により為替差の悪化を予想しています。コテ金鉱山は、2025年12月に設計処理能力100%を目指し、ランプアップを続けてまいります。

②海外銅鉱山（おもにモレンシー銅鉱山：12月決算会社）

モレンシー銅鉱山は、銅価格の上昇により価格差の好転と、為替の円高進行により為替差の悪化を予想しています。なお、コスト単価差の好転は、操業コスト削減や効率向上の取り組みの成果等を見込んでいます。

次に持分法投資損益について説明します。

①セロ・ベルデ銅鉱山、カンデラリア銅鉱山（いずれも 12 月決算会社）

両鉱山ともに、生産計画に変更はなく、12 月決算会社に適用される 1-12 月の銅価格の上昇による価格差の好転を予想する一方、為替の円高進行による為替差の悪化を予想しており、5 月予想から大きな変動はありません。

②ケブラダ・ブランカ銅鉱山（12 月決算会社）

JV パートナーでオペレーターのテック社（カナダ）の発表のとおり、鉱石から金属を回収するプロセスについては立ち上がってきていますが、金属を回収した後の鉱石を貯留する設備への追加対応と、その影響を受けた生産計画の下方修正のため、2025 年度の業績は 5 月予想時から悪化を見込んでいます。

現在進めている追加対応が完了すれば、ケブラダ・ブランカ銅鉱山は、競争力が高く、長期にわたり当社の収益基盤となる銅鉱山という位置づけは変わっていません。JV パートナーと引き続き協力し、操業の安定と最適化、デボトルネッキングなどの取り組みを進めてまいります。

2) 7 ページ 予想比較 製錬セグメント

補足説明資料の 7 ページ 予想比較 セグメント別－2 をご覧ください。

次に製錬セグメントについて説明します。ページ左上「売上総利益」のボックスをご覧ください。

【製錬セグメントの売上総利益】200 億円（140 億円の減益）と予想しています。

銅系では為替の円高進行による在庫評価損益の悪化、ニッケル系では価格の低迷と在庫評価損益の悪化がその要因です。それ以外の要因について説明します。

①銅系

コスト単価差の好転は東予工場の操業費用の低下を、その他の好転は硫酸価格上昇を予想しています。

②ニッケル系

ニッケル価格は 5 月業績予想から下落した水準を想定していることから、価格条件差が悪化すると予想しています。

3) 7 ページ 材料事業セグメント

補足説明資料の 7 ページ下段、材料セグメントの製品群別売上高です。

電池材料事業については、販売価格に連動する金属価格下落の影響により、減収と予想しています。

なお、正極材品種切り替えの予定に変更はありません。

また、足元では、事業の立て直しにむけ、コスト削減や生産体制の見直しを進めています。今後の市場成長を見据え、引き続き、要素技術の開発、生産性の改善、正極材の性能向上、コスト削減など競争力の強化に努めてまいります。

機能性材料事業については、電子部品市場における需要には濃淡があり、全体としての回復は緩やかなものととどまると想定しています。

以 上